教科教育キャリアアップフィールド

教材研究と授業改善・器楽指導の課題

音楽教育専修　　朝　田　　健

1．はじめに

12年目研修は今回で三年目になる。

音楽科の研修目的は自己の音楽的資質を高めることが大きな課題の一つであろう。ひと月あまりかけてじっくり取り組むのには充分な課題である。一方，授業者としての視点から，今までの実践をふりかえり，教材研究，授業計画などの方法改善も重要な課題である。普段実践の中で課題意識を持っているものをじっくりとひと月あまりかけて考えることのできるこの研修は今後の実践の基となるであろう。

このような観点から，私の場合二つのコースを開設している。「教材研究と授業改善」と「器楽指導の課題」である。教材研究のあり方，授業方法の検討，器楽指導における楽器奏法技術の問題と指導法の問題などを検討していこうとするものである。

次にコースの概要とねらいを述べ，研修実践例として器楽指導の例を二つ述べ，平成17年度の12年目研修の報告とする。

2．コースのねらい

1）教材研究と授業改善

指導要領に基づき音楽の基礎を教えながら音楽を好きになる子どもたちを育てると言うことはなかなか難しいことである。音楽を多角的にとらえ基礎から感じる心まで幅広く体験する。音楽教育では教えたいこと――音楽の基礎・基本＝つけたい力 ―― と感じさせたいこと ―― 心動かされる聴き方・心動く歌い方 ――を分けて教えることはできない。そこで単元ごとの教材曲を充分吟味してその曲の持つ音楽とその支えになっている仕組みを充分理解した上で指導目標と照らし合わせて授業を進めるという方法が重要となる。

日頃，小学校・中学校の研究授業などを見て感じるのは，学校の研究主題にのっとり児童生徒の実態をよくふまえて研究テーマを設定し，研究を進めており，その洞察力に感心させられる。しかし扱っている教材曲を深く理解して研究にあたり授業を進めていくとよりよい授業研究ができるのではないかと思われる場面によくであう。教材曲の性質，特徴を科学的に理解して教える根拠を明確にした上で指導する。このことを再確認する必要があると考える。

このコースは，今進めている実践や研究をより充実したものにするために，今までの実践をふりかえり，教材曲の深い理解とその理解を生かした授業への取り組み，ひいては授業計画の改善へと導くことができるようにとの研修方針を立て進めていこうとするものである。

2）器楽指導の課題

器楽指導をする場合，第一に重要なことは教師である自分がどれだけ楽器をコントロールすることができるかということである。どの程度楽器を演奏することができるか。もう一つは楽器をうまく演奏することはできなくても教則本や練習曲を用いて指導する練習計画を明確にする，また，到達目標をしっかりたてるというような系統的な指導が準備できるかということである。先生自身の楽器演奏能力も重要であるが，練習の指導計画，明確な練習目標など計画的に進めることも重要である。指導計画の充実によりゆっくりであるが確実に子どもたちはのびていく。

楽器の演奏については学生時代などにある程度集中していた時期があれば指導する場合には充分活用することができるが，今から何かの楽器を指導のために始めると言うことはなかなか難しい。でも，一度は先生自らトランペットを吹いてみたり，サキソフォンを吹いてみたりするという経験は重要だと思う。唇の振動具合，音を出すための口のまわりの状態（アンブシュア），おなかを使った充分な呼吸と息の支え（リコーダーや歌の場合とかなり異なった感じがする）など子どもたちと一緒になって練習することが大切である。

一つは，先生ががんばっている姿を見せる，今ひとつは，こどもとは異なる視点から考えて練習するので充分に指導に役に立つということである。音楽の先生なら，また学校の先生ならかなり深い思いをもって音を出すから子どもたちよりも目的意識のある音を出すことができる。これらの経験は，練習している子どもの気持ちを理解したり，苦労している時のちょっとしたアドヴァイスが当を得たものとなったり，何よりも一緒に音楽に取り組んでいるという感覚が子どもたちを音楽へ真剣に目を向けさせるきっかけになる。

3．研修の内容

1）Ａ小学校の場合

Ａ小学校では毎年４，５，６年生による金管バンドのドリル演奏がおこなわれており，全職員が指導に当たっている。９月の運動会での演奏に向けて前年度11月頃から約一年かけて練習に取り組んでいる。４年生はリコーダーと鍵盤ハーモニカを演奏し，５，６年生はトランペット，アルトホルン，トロンボーン，ユーフォニアムなどの金管楽器，大太鼓，スネアドラム，マーチングベル，トリオタムなどの打楽器を演奏する。運動会当日は家族，来賓などの見守る中，堂々とした演奏が披露される。リコーダーなどを演奏して運動会などを終えた４年生は11月から次年度のために楽器の割り当てを決めて，上級生に演奏の手ほどきを受ける。

フォーメーションは音楽の先生を中心に考えられ形作られる。金管楽器，打楽器の指導も上級生と音楽の先生を中心に，担任の先生などのサポートを得て進められる。夏休みにはいると運動場に出て，最終段階の練習が始まるが，全員で指導している割には効率的な指導ができてはいなかった。

これらの状況とＡ先生の研究課題「よりよい演奏を求めようとする子供を作るための工夫（生き生きと活動する鼓笛活動）」に沿って研修者同士の話し合いを進めた結果，三つの方法を導き出した。

a）プロのドリル演奏を鑑賞したり自分たちの演奏曲の模範演奏を聴こうということで，前者に関しては「ブラスト」の一部を鑑賞する。演奏模範に対しては，学校で演奏している楽

器編成と同じ演奏を市民バンドに依頼し，その録音を聴く。

b）運動場での練習を効率的におこなうため，全職員の役割分担を明確にし，また仕事内容を明らかにして，それを一覧できる図面を作成し，先生方が積極的にかつ集中的に指導できる体制作りをする。

c）先生自ら楽器の演奏を体験し，音を出すためのこつをまとめる。また，職員の中で楽器経験者を見つけ出し音楽的指導の充実を図る。

とくにb）では職員の役割が明確になったことで，まず先生方が積極的に指導に当たることができるようになった。目の行き届いた子どもたちは生き生きとした活動に取り組み上達もめざましいものとなった。また，それを誉めて価値づけることにより，よりよい演奏を求めて活動が活発になった。

2）B中学校の場合

B先生の研修テーマは「吹奏楽部顧問としての資質向上」である。大きなテーマであるが，いかに指導側のレベルアップが子どもたちの学習に関わるかをよく理解され，自らを高めようとしている姿勢が伺われる。

B先生は大学の授業で管楽器を少し練習しただけで，音の出せる状態ではない。しかし，顧問になって3年生を中心に子どもたちを中心に据えた活動を展開し，それを支えるように卒業生などを招いて，指導体制を整えたりして積極的に指導してこられた。

先生自身が言われるように自分で楽器が演奏できたり，楽器のことについて詳しくなることが重要であることはわかっているのだが，なかなか練習する時間がない。そこで，部活の時間の効率的な活動システムを構築し，自分はその活動の助言をするという方法を考え，一方で自らの音楽的能力を高めるということを考えた。

a）活動時間の流れを明確にし目標を明らかにする。

b）演奏の基礎を確実に身につけるためのトレーニング方法の工夫。

c）基礎練習を徹底させ，パート練習を充実するためのパートリーダーの育成とその役割の明確化。

以上の三点について検討することになった。

a）の内容は短い時間の中で有効的に活動するため，はじめの挨拶の時に本日の目当てと練習の流れを連絡する。1）個人練習，2）パート練習，3）全体練習の流れをその日その日でよく考えバランスよく練習する。特に活動の意義づけとしたあいさつ係の言葉がけに対応して，一人一人に今日はこれを目当てに練習しようという姿勢が定着した。それにより課題を少しずつこなすことができ一人一人の力がついてきた。c）のパートリーダーの育成については，3年生から2年生への引き継ぎをしっかりさせたが，紙面だけでは充分とは言えず，練習のおりにふれて「練習方法」「指示の仕方」「評価の仕方」の三点を重点的にかつ具体的に指導し，その積み重ねによりパートリーダーの具体的な仕事役割を定着させた。課題として，技術の訓練は具体的に積み重ねられ上達がわかってはくるのだが，音に関しては言葉だけでは当然充分ではなく，耳を鍛えることが必要であるとわかり，録音媒体や，映像，生の演奏など積極的に演奏を聴く機会を設定していく必要があることがわかった。

9月10月に研究を基に練習を進めていくことにより11月下旬の演奏では夏のコンクールと比べて，格段にまとまった演奏ができ，充実感を味わうことができた。

4．課題と展望

以上のように，二つの事例を上げ，研修生が自らの指導についてよく考え改善点を導き，それに対しての手だてを考え改善していく過程を考えた。

B先生が課題にしているようにつきつめていくと子どもに力をつけるためにどのような方法があるかではなく，子どもたちに応えるために自分をいかに高めていくかになるのではないかということが実感できた。一ヶ月あまりとほんとに短い時間であったと思われるが，自分の実践をふりかえり課題を的確に探り当て，その課題を解決するように努力することで，まず先生が意欲的に活動され，周りの子どもたちが積極的に音楽に取り組む姿が見られるようになった。自らをふりかえることで新たな自分を発見したり，忘れていた自分が復活したり，「自分の12年」を糧として，教師の道を歩んでいく，そういうきっかけに12年目研修コースが役立つであろう事を実感したものである。

コース設定と研修の課題設定は三年続けているが研修生の問題意識とほぼ対応しており，毎年一定数の研修生がこのコースを選択する。あとは指導側の改善が求められる。レポートを読むと研修生の真摯な振り返りのきっかけとなり，先生の姿勢が変化することにより学習効果もたかまっているということがうかがい知れる。

研修方法については第一日から第五日までの一ヶ月間あまりのあり方として，AIMSやメールがうまく活用し切れていないのは反省すべきである。一ヶ月の間に対面指導の設定がなされていない点，多くの指導教員がおこなっている研修内容や成果を実践として生かすための授業研究を実施することなど，より密度の濃い研修にする方法を来年度以降に取り入れようと思う。